

第 15 回：沖縄の課題

1. イントロダクション：沖縄銀行問題

- ・ 沖縄に一流が存在しない理由は、第一に、大量の補助金によって、心の自立を失ったこと ▶ 第二に、文化・社会的な背景がある ▶ 心の自立と経済的な自立を実現するために、欠かすことの出来ない 3 つの要素
 - 生産性： 経済的な自立を実現するために、補助金や特例やその他多くの特別扱いに一切頼らず、自ら稼ぐ力 ▶ 生産性を生むためには、精一杯働かなければならない、はたらくことが所与である以上、その方法は、①辛く働くか、②楽しくハタラクか、の 2 種類しかない
 - 質： 差別化できないものに生産性は生まれない、差別化とはオンリーワンであるということ、オンリーワンであるということはその分野で一流だということ、持続的な差別化は常に質による、質の低いものに一流のモノは存在しない、一流のモノやサービスは、一流の人にしか生み出すことができない ▶ 一流の人材とは？一流の人材になるための要素とは？
 - 人を育てる： 人を育てない組織や社会に将来はない、厳しさのない教育は存在しない、愛情を持って厳しく指導するリーダーを選別・登用するしくみ ▶ 沖縄の「打たれ弱い」人材を、打たれ強くすることは可能か？

・ 返信のないメール

沖縄タイムス | 沖縄銀行、印鑑票 1396 枚紛失 誤廃棄の可能性

http://article.okinawatimes.co.jp/article/2012-06-30_35739 | 一週間前の記事だが、沖縄銀行のこの不祥事の背景はとて深い。沖縄銀行の企業文化に根深く巣食う重大問題の、氷山の一角が顕在化したに過ぎないからだ。

私は沖縄銀行との接点が非常に多い。沖縄銀行の行員は、今まで、仕事とは全く別に、直接会話した方々だけでも 50 名をゆうに超えるし、直接間接に人となりを知る方々を合わせると、100 名近くの方々の性格、キャリア、人間関係などを少なからず存じ上げている。

私の法人の銀行口座も沖縄銀行だし、最近では個人のメイン口座も沖縄銀行を利用するようになった。かつて沖縄の中央銀行だった琉球銀行に代わって、実質的なトップバンクと評価されつつある沖縄銀行に対する心からの期待を込めて、率直にコメントしたいと思う。

沖縄銀行の行員は、私の「次世代金融講座」にもかなりの数参加頂いているし、沖縄の主要金融機関の中でも、若手の自己啓発意識は、突出して高いという印象がある。最近の若手行員は学歴も高く、いわゆる「優秀」な人材が目立って多く、順調に見える企業業績と相まって、各方面からの期待も高い。

しかしながら、これは、本当に偶然とは思えないほどのはっきりした傾向として、大半、とって差し支えない比率の行員について、あまりに基本的な所作が、それがとても社会人とは思えないほど、ぞんざいなのだ。

本当にとるに足らないことのようにだが、例えば、営業でもなんでもない、私的な関係の私的なパーティーにお誘いしたメールの返信が、それこそ何度送付しても返ってこない。誠意を尽くして問いかけても、放置される。

それが、一人や二人であるならば、そんなものかとも思うのだが、この現象は、少なくとも私が良く知る数十名の沖縄銀行員に共通するもので、かつ、その状態は、何年にも亘って、それこそ何度も

繰り返されながら、全く改善の兆しすらないどころか、彼らの意識には、問題であるという認識すらないと思う。

私的なケースだけではない。私にしてみれば滅多にお願いしない銀行本来の業務について、私のシンプルなリクエストについて検討すらされずに数週間放置され、納得できる説明もないまま、最小限の結果だけでお茶を濁される。

あまりに長期間にわたって、あまりに多くの行員が、あまりに程度の低い対応を繰り返すのを見かねて、ようやく先日、私が個人的に見込んだある行員に、その ことの、ほんの一部についての問題意識を投げかけた。彼の回答は「いや、樋口さん、彼はいいやつなんですよ。」私はただ驚くしかなかった。

私は、随分長い間、沖縄銀行にいったい何が起きているのか考え続けてきた。先日沖銀が、約1400件の顧客の印鑑票原本を紛失、誤廃棄した記事を読んで、私の問題意識は沖銀の在り方に関わる重大な問題に繋がっていると直感した。

私の経験では、このような不祥事は、何の前触れもなく起こることは殆どあり得ない。それどころか、このような問題は、日常的に頻発し、多くの行員が繰り返 し目にし、恐らく多少の行員は僅かな声を上げ、それでも、現場で、あるいは本社から放置される形で問題が増幅したに違いない。

ほぼ確実なことだと思うのだが、この問題(あるいは、問題が生じる可能性)は、現場の多くの行員が、長い間、既に知っていたことだと思う。本当の問題は、その問題の発生ではなく(問題は起こるものだ)、なぜ、誰も意味ある形で声を上げなかったのか、そして、その声を誰も受け止めなかったのかということだろう。

・ 琉球銀行の(実質)破綻

この問題の起源は平成11年(1999年)に遡る。この年、琉球銀行が227億円の第三者割当増資ならびに400億円の公的資金の導入を実施し、事実上破綻したのだ。この年を境に、かつて琉球政府のメインバンクとして君臨し、長らく沖縄のトップ銀行だった琉球銀行と、「永遠の二番手」だった沖縄銀行の間で、学生の人気ランキングが逆転した。

一般に、業界のトップ企業と、二番手企業の間には、人材の質において(少なくともその素材の質として)著しい格差が生じるものだ。

沖縄銀行では、平成12年以降に入行した若手行員(現在30代以下)の質が急激に向上し、それ以前に入行した行員(現在40代以上)との能力、学歴のギャップが著しく拡大することになる。

現在私が目の当たりにする、沖銀若手行員の啓発意識の高さは、この現象を反映したものでしょう。ところが、中堅以上の年次の行員は、長い間の二番手意識と、どこかしら心の底に残るコンプレックスを、根深く引きずることになる。

二番手企業以下は常にトップ企業のことを意識するが、通常トップ企業は二番手以下の企業のことなど、殆ど視野にないものだ。

現在までの沖縄銀行は、預金金利を、実に全国の最高水準まで引き上げて、預金量を確保しようとするなど、事業の本質と経営の王道を歩むよりも、琉球銀行を「抜く」ことを至上戦略としているように見えるのだが、この発想自体が二番手企業に典型的なものである。

しかしながら、現在の沖縄銀行において、琉球銀行を「抜く」ことの重要性を感じているのは、40代以上の行員のみであり、30代以降の行員にはまったく「意味の分からない」戦略と映っている。

既に事実上沖縄のトップ銀行という認識を持つ若手行員にとって、預金金利を異常な水準にまで上げ、企業価値を毀損させてまで「名」を取りにいこうとする経営陣の感覚は、理解しにくいだろう。

・ 教育できない組織

沖縄の世代ギャップと、中堅以上の行員のコンプレックスは、自行の若手行員に対して、強く指導・教育できない上司を大量に生んでおり、結果として、学歴は高いが、甘やかされ、人生の厳しさも、仕事の基本動作も学ばない、プライドはあっても基本動作が著しく未熟な若手を大量生産しているのだ。

そこに重大な問題があっても、勇気を持って誰も指摘しない。二番手意識を持つ上司が、「エリート」部下に対して、厳しく仕事を指導するためには、自分の仕事を改めなければならない。しかし、二番手の仕事ぶりが身に付いた体では、人に厳しくするほどぼろが出る。

過去の自分がどのようなものであれ、明日からでもトップ銀行の誇りをかけて一念発起して、胸を張れるように努力すれば良いのだが、二番手に甘んじてきた習慣がそれを妨げる。結局、だれも何も指摘しない、できない文化が蔓延し、甘い仕事当たり前になる。私が聞いた話では、あるエリート行員は、入行以来上司から叱られたことが一切ないそうだ。行内の仕事の多くは、期限が守られることが少なく、それを所与として、仕事を振るため、期限の設定は形骸化している。信用を生業とする金融業としては、にわかには信じ難い話だ。日本のまともな金融機関でそんなことが起こりえるのは、ひょっとしたら沖縄銀行だけではないかと思えるくらいだ。

自分の大切な人に、自分が本当の意味で役に立とうと思えば、その人から嫌われる覚悟なくしては不可能だ。そのような覚悟がない付き合いなど、どんなに言葉を飾っても、どんなに表面上仲良く見えても、どんなに長く続いても、結局その人間関係を利用しているに過ぎないと思う。

沖縄銀行では、それと同じことが起こっていると思う。一人一人の行員は、一見一生懸命働いているように見えるのだが、そして実際大量の仕事を少人数でこなしているのだが、しかしその本質は、沖縄銀行を利用するだけで、本当の意味で沖縄銀行を強くしようなどとは考えていないのだ。

それこそが、二番手のメンタリティそのものであり、沖縄銀行が向き合うべき最大の問題だ。それに比べれば、預金量や貸出総額や利益の額など、全く重要性の低い問題なのだが、この本質に沖縄銀行の経営は気がついているのだろうか？

・ 沖縄社会の最大の問題の一つは、企業が(特に若手の)教育に関心がないこと

- 若手の離職率の高さは、沖縄社会・経済の重大問題
 - ◇ 就職後3年以内の離職率45%(全国平均31%)
 - ◇ 大卒就職率48%(全国平均61%)
 - ◇ 有効求人倍率31%(100の求職者に対して、31の仕事しかない) ▶ 企業にとっては、人をそれほど大事にしなくても、いつでも、大量に、安価に雇用しやすい ▶ 人ならすぐに雇えるし、どうせすぐ辞めてしまうのなら、教育にお金はかけられない ▶ 嫌な思いをしてまで、言いにくいこと指導してまで熱心に育てる気になれない ▶ 教育力の著しい低下のスパイラル
- 相手のことを本当に思って、厳しく叱れない、指摘できない ▶ 迎合と優しさは違う

2. フリーライダー社会

・ NO と言えない沖縄

お互いを(表立って)傷つけず、全てを曖昧にして、お互い、可能な限り NO と言わない、言わせないことで、社会・経済のバランス保っている沖縄社会では、NO と言われるだけの十分な理由がある(例えば、怠惰な)人よりも、NO と言う(いわば、正しい)人間が(実質的に)批難される。

沖縄社会の厳格なルールは、第一に、NO ということの範囲が極めて広いということ、NO とは常に、個別のものに対するものではなく、人間関係に対するものだということ、そして、沖縄社会は NO というメッセージに極めて敏感だということだ。

本土の感覚では、「これしきのこと」も、たとえば、パーティーの誘いを断るといった、些細なことでも、NO と言ってしまえば、これはパーティーを欠席するという意味ではない。貴方とは付き合いたくない、という意味に近いのだ。

狭い沖縄社会で、人間関係を断ってしまえば、あっという間に孤立する。誰も自分の店にきてくれず、事業は倒産、生活基盤が崩壊するほどのインパクトがある。

沖縄における、NO は極めてシリアスなもので、それを避けるためであれば、沖縄人は殆どどんなことでもするし、沖縄社会的にも、大概のことが許容される。NO と返事をするくらいだったら、返事をすっぽかす方がいい、NO と言うくらいだったら、興味もないのにお金を振り込んだ方がいい。

沖縄人はテーゲー(適当)で、約束を守らず、人間関係がいい加減だ、とよく言われる。確かに現象だけを見るとその通りなのだが、私は違う解釈をしている。この社会では、本当に NO ということ、生活基盤を脅かすため、ある意味誠実に NO と言いたくても、社会がこれを許容しないのだ。

この沖縄社会の不文律は、どれだけ沖縄生活が長い本土人にさえも殆ど理解されていないし、沖縄人でさえ、言葉で説明できる人は殆どいない。私も、長らく沖縄の人間関係に悪戦苦闘しながら、試行錯誤を繰り返し、目の前の一人一人に常に向き合い続けて8年、ようやく理解できたような気がしている。

・ フリーライダー(たかり)社会

社会には4種類の構成員が存在するという考え方がある。一匹狼、協力者、フリーライダー、処罰者だ。一匹狼だけの社会は余りに非効率であるため、人は協力し合うことで、生産性を高めて来た。しかし、協力者が増えて、社会に余裕が生まれるとほぼ確実にその成果に便乗する(たかる)フリーライダーが登場する。

そこで、フリーライダーを処罰する機能(処罰者)が社会に必要とされるようになるのだ。

沖縄社会が極めてユニークなのは、その殆どが協力者とフリーライダーだけで構成されている点ではないだろうか。先に述べたように、(多くの本土人のような)一匹狼や処罰者は、沖縄社会ではほぼ存続できない。

処罰者の言い分がどれだけの的を射ていたとしても、人を表立って批判することは、沖縄社会ではタブーに近いのだ。どれだけユルイ対応に対しても、受容することができなければ、貴方には、やんわりと、しかし確実に、誰も近寄らなくなる。

結果として、処罰者は沖縄社会で経済基盤を維持できず、存続できなくなる。本土復帰以来40年、沖縄で成功したと言える本土企業や、ナイチャー(本土人)がほぼ皆無だという事実が、この仮説を裏付けていると思う。

もちろん、沖縄には、現在本土企業も、本土出身者も生活しているのだが、その経済基盤の殆ど

が本土相手の商売であり、規模の大小に関わらず、沖縄社会から売上を上げ続けることができているものについては、少なくとも私が知る限りでは、今までに数例しか見たことがない。

沖縄社会では、(それがどれほど筋が通っていても) 処罰者になるくらいなら、フリーライダーである方が遥かに居場所を見つけやすい。ただし、自分からフリーライダーだと名乗るフリーライダーはもちろんいない。沖縄のフリーライダーは協力者と殆ど見分けがつかない状態で、社会の至る所に居場所を確保している。

- フリーライダーの多くは、いい人で、人の批判をせず、話を良く聞き、自分の意見を明らかにせず、議論をせず、被害者で、優しく、一見熱心のようにも見える。フリーライダーは全力を尽くして、(フリーライダーであるという) 本心を隠し、自分の居場所を確保しようとする。多くの場合、本人も自分がフリーライダーだと言う自覚はない。フリーライダーを見極めるのは相当困難で、正直なところ、何度か痛い思いをするくらいの経験が必要だ。
- ◇ 建築家 A さんの苦悩 ▶ 4人で始めた事務所が機能しない、経理も掃除も自分、分け前は4等分、仲間は午後から出社 ▶ 一緒に仕事をするメリットが存在しないにも拘らず、関係を解消できない ▶ 実質的に、親友からたかられ続け、心を殴られ続ける ▶ 彼は、仲間のために、そして自分のために、この関係を解消できるか？
- ◇ 賛同しながら、「応援」しながら、何もしない
 - お得な人、モノに寄り添う ▶ たかりの名人は、たかっていることを悟られない
 - どうすればいいでしょう？ ▶ 「猛勉強するべき」というアドバイスに絶句
 - 「沖縄のために頑張ってください、応援しています」
 - 意見がない、質問がない ▶ 自分のこととして考えていないから結局関心がない
 - 自分で動かない、人を変えようとする、自分でやるべきことをしない

この社会のルールは、狭い島社会で、お互いを傷つけず、できるだけ人間関係をスムーズに運ぶための、深い知恵だとも言えるのだが、この社会構造が沖縄最大の弊害を生んでいる。「フリーライダー」の蔓延である。

直接 NO と言えない社会であることに甘えて、人を騙す人、約束を破る人、物事を曖昧にして自分の利益を確保する人、碌に働きもしないで人の成果に便乗する人…。沖縄(と本土)のトラブルの多くは、ここに起因している。

沖縄社会は、たかりと詐欺師が驚くほど多いことが特徴の一つなのだが(多くの場合詐欺は本土人に対するものなので、沖縄人はその事実をあまり知らないのだが)、これは、以上のような、沖縄社会の構造によるものだろう。

沖縄に資本を持ち込む本土人や、少しばかり「成功」した沖縄人は、この強力な社会構造に飲み込まれて、あっという間に骨抜きにされがちだ。多くの講演会に引っ張りだこになり、各所から持ち上げられ、県庁からは補助金を持ちかけられ(それも、断れない状態で、半ば脅しのよう)に…

事業の案件でも、社員の雇用でも、「成功」企業が一旦沖縄社会で接点を持ち始めると、それがどれほど質の低い案件であったとしても、従業員の程度がどれほど低くても、事業的に NO といえ、激しい批判を受ける。沖縄で、本当の意味で「成功企業」が生まれられない理由はここにある。

沖縄に存在する「事業」の殆どは、(広義の意味で) 補助金なしでは成り立たないし、政治活動の輪の中にどっぷりと浸からなければ、仲間から見捨てられて売上も上がらない。したがって、沖縄の「事業家」の殆どは、保守系政治と県庁の方ばかりを見て、大半の時間とエネルギーを費やしている

- 政治と補助金に依存する沖縄の「事業家」：数年前、翁長市長「飛び出せ市長室」での出来事 ▶ 沖縄を代表するような企業経営者ら、参加者10数名が全員、市長を前にして「自分のして欲しいこと」にしか関心がない ▶ 「那覇市のホテル経営者として何ができますか？」と聞いたのは私だけ ▶ 君たちはどんな大人になる？
- 補助金事業への入札が仕事だと勘違いしていないか？ ▶ 入札を取れば簡単に数億円から数十億円の売上になる ▶ 地元新聞などで取り上げられる大半の「優良ベンチャー」の実態 ▶ こんな「売上」に依存した企業が、本当に雇用を維持できるのだろうか？
- ・ 顧客にたかるフリーライダー(独占)企業
 - JTA、沖電、銀行、オリオンビール・・・ ▶ なぜ離島路線はこれほど高額？電気料金は日本一？貸出金利が高い？酒税減免分の利益しか生み出せていない？沖縄の優良(独占)企業は、本当に地域のための存在と言えるのか？地域にたかっているだろうか？
- ・ フリーライダーと基地経済 ▶ 心の自立を失った沖縄

通常は、これだけフリーライダーの比率が高ければ、社会が持続性を失うのだが、沖縄の場合は極めて特殊な、米軍基地の存在によって、有形無形の大量の補助金が過去40年間に亘って注がれ続けて来たために、少なくとも現時点まではこの構造が維持されているのだと思う。

以上が仮に真だったとして、それ自体に良いも悪いもない。もちろん、私はそんな沖縄社会を批判する立場にも、擁護する立場にもない。しかし、現実的な問題は、この沖縄社会構造を支えてきた大前提が、遠からず大きく変化する(崩れる)可能性が、どんどん高まっているということだ。

私の勝手な相場観では(といっても、今まで重要な点において、殆ど外した記憶はないのだが)、アメリカの金融は早晩大きく崩れる。そうすれば、日本も、そして、沖縄基地経済の基盤も大きく揺らぐことになる。

仮にそのような自体が生じた場合、・・・そしてその可能性はそれほど低くないと思うのだが・・・沖縄はどのように社会を守り、生活を維持し、将来の展望を描くべきだろう。これが、現在の私の最大の関心ごとの一つである。

なぜならば、このような前提における地域再生は、経済問題に留まらず、沖縄社会と文化の基盤と人間関係を直撃することになるからだ。

そのときまでに、新たな社会モデルを構築することができなければ、沖縄は大きく毀損した生産性を埋めるために、本土社会に倣って、処罰者を大量に配置しなければならなくなる。それは、沖縄社会にとって、経済の崩壊以上に、最悪の出来事となるだろう。

今まで NO ということをし、社会全体で、全力を尽くして避けて来た沖縄は、結果として、極めて打たれ弱い社会人(特に男性)を大量に擁している。先のような事態が生じれば、沖縄社会は本当に不幸な結末を迎えることになる。

社会の大変化を受け身で迎えるのではなく、待ち伏せするために、処罰者の存在なくして、生産性を維持できるような、本土社会ですら実現できなかった、次世代沖縄社会モデルを生み出さなければならない。

それを実現するための要件は、現在の沖縄社会の基本構造から独立して生産性を生み出すことができる事業体であり、沖縄社会に波及的な効果を生み出す、中核事業である。

3. 沖縄社会の基本原則

① NO や指摘は、人間関係に対する NO

- 誘いを断ると、「10 人単位」で友人が減る
- メールで講座・懇親会の出席・更新を断ることすら難しい
 - ◇ なぜメールの返信がないのだろうか？ ▶ 「断るくらいなら返信しない」という沖縄の社会常識？ ▶ 再度確認の連絡をしてくる方が、「イヤミな人」「強引な人」「人を変える人」と解釈される
 - ◇ 反面、連絡がないことで相手が迷惑を被ることは、沖縄社会で問題視されない、逆に、(これしきのことを)問題視する人の方が排除される
 - ◇ 断らなければならない状態を避けるために、その場を曖昧に「流す」ために、誤摩化しも、嘘も、無視も厭わない
- クラクションを鳴らさない沖縄 ▶ 実は、「クラクションを鳴らせない」沖縄 ▶ どれだけ傍若無人な運転をしていようと、その車よりも、クラクションを鳴らした方が責められ、やがて周囲から人が消える
 - ◇ 右折事故が異常に多い沖縄 ▶ 不注意で右折するよりも、「ぶつかってくる方が悪い」というメンタリティ
 - ◇ ATM の順番に人が割り込んで来ても、誰も文句を言わない、言えない

② NO と言わせてはいけない

- 沖縄社会では、NO と言わない(テゲーな)人よりも、NO と言わせる(怖い)人が非常識
- 断らなければならない状況に人を追い込んではいけない ▶ 断れない状況を創り出した人が恨まれ、それを見た周囲の人はその人から遠ざかる
 - ◇ メールによる返信を求められると、反発を感じる(NO と言わせられた！)
- 講座の案内メールに、一度も参加せずにお金だけを振り込む、または、一度だけ参加する義理受講者 ▶ 誘った方が借りを作る ▶ 沖縄社会では、相手が断れないオファーを出す方が無礼者

③ YES であることが、人間関係の初期設定

- お店に「行ってあげない」ということは、友人ではない、という宣言に近い
- 顧客を紹介しているのに、お返しに「来ない者」は無礼 ▶ 強い怒りが正当化される

④ 人に対して、指摘・批判してはいけない ▶ 放置する人間関係

- 意見を持たない、言わない
 - ◇ 意見を言って人と対立するくらいなら、意見を言わない
 - ◇ 人と違うことをしない
 - ◇ 考えない

- たとえこの先、友人が滝壺に落ちることが分かっている、当人に直接指摘する人はいない
 - ◇ 高校時代からの模合仲間 ▶ まずい食事を出し続けるレストランオーナーに対して、親友たちは何も言わない、売上が減り続ける状態に問題提起もしない ▶ 自宅で食事をしてから模合に出かけ、自分の分の模合金もオーナーに取らせる・・・ ▶ これは優しさか？甘やかして友人を駄目にしていないのでは？
 - ◇ 「正直言って、彼はどうでもいいんです」 ▶ 人に関心が希薄な社会？
- 人に対する指摘や批判をすると、沖縄社会では「加害者」のレッテルが張られる
 - ◇ 批判は(それが有効な事実であっても)批判した者が加害者となる
 - ◇ 特に面前で批判する(指摘されたものが大恥を搔く)ことは最悪の行為 ▶ 二度と許されないほどの恨みを買うことがあり、かつ、指摘したものが周囲から強いプレッシャーを受ける
- 指摘して加害者になるくらいなら、甘やかして人を駄目にする、見て見ぬ振りをする？ ▶ 殆どの沖縄人は、「火の中の栗」を拾おうとはしない、それが友人であっても同様？
 - ◇ 部下に指摘できない沖縄銀行の上司
 - ◇ ウチナー婿とナイチャー嫁 ▶ 流れ者のナイチャーを更に甘やかすウチナー嫁
 - ◇ 沖縄の長男(特に金武町？)
 - ◇ ある幼稚園園長の話： 隣のアパートのナイチャー母子家庭で虐待 ▶ (自分が特定されるから?)通報できない ▶ 子供がトイレに入ってその様子を聞いている ▶ 引越しをしようかと悩んでいる ▶ 手順やルールを熟知しているが、虐待を通報したいとは思わない、関わりになりたくない ▶ 「いつものこと」と考える自分がいる

⑤ 常に被害者であれ

- 被害者でありさえすれば社会が助けてくれる
 - ◇ 誰かに直接(目に見えて)対抗しなければ、人を変えなければ、意見を持たなければ、被害者でいれば、後は社会が助けてくれる
 - ◇ 「直接手を下していないように」形式を整えることが極めて重要 ▶ ただし、実質的に攻撃していないわけではない ▶ 「相手が望んだこと」、「相手がはじめたこと」、「ナイチャーがしたこと」・・・

⑥ 物事の基準は相手が許容するか否か

- 「相手に許容されるか否か」が最大の判断基準
- 相手が許せば、基本的にすべて正当化される
- ただし、ほんの僅かな「表情」や「オーラ」も読み取る ▶ 嫌な顔をしない相手からは、どこまでもたかる

・ システム重視の社会

- 人に対する意識が希薄だが、人間関係のシステム維持に対する意識は鋭敏
- 人に NO と言うこと、指摘することを嫌う文化 ▶ 何か問題が生じて、問題を生み出した人よりも、その人を厳しく指摘する人物の方が、社会から疎まれ、やがて排除される ▶ それ
が傲慢な姿勢であればもちろんのこと、しかしそれが、どんなにまっとうな、そして愛情に基づ
く指摘であっても、「被害者」が守られ、指摘した「加害者」が批難される。
 - ◇ 以上のコミュニケーションによって、たとえ相手が困っても構わない、「相手」に対する
誠意は重要視されない ▶ 沖縄における誠意は、他人に対するものではなく、沖縄社
会システム(の維持)に対するもの
 - ◇ 沖縄社会は、一人一人の人生よりも、人間関係の現状を維持することに関心があり、
そのため、自分の友人が周囲からどれほど甘やかされて駄目になろうと、結局関知せ
ず、自分が「加害者」になりさえしなければ、波を荒げなければいいと考えているように
見える。
 - ◇ 例えば、長年の友人が(あるいは、長年の友人だからこそ)、この先大きなトラブルに
巻き込まれることが分かっている、「あなたの行動を変えるべきだ」と忠告する者は、
本土の感覚と比較すれば、驚くほど少ない。
 - ◇ 嫌われるのではないか、「加害者」として社会から敬遠されるのではないか、うるさがら
れるのではないか、ということのを恐れ、毅然とした態度で接することができない。しかし
ながら、それは決して人のためを思っているからではなく、自分が沖縄社会から浮い
てしまうことを恐れる保身のためだ。
- 沖縄で、人に指摘することは、それほど難しい ▶ (時には、相手の聞きたくないことも口に
しながら)正直に・誠実に人と接しながら、沖縄社会で居場所を見つける恐らく唯一の方法
は、贈与的に生きること ▶ 人に対する批判ではなく、処罰ではなく、愛情によって接する
▶ 人の本心をつかみ取る能力は、沖縄はピカイチ

4. あなたが変わる

- ・ 世の中を変える方法は二つに一つ、人を変えるか、自分が変わるか
- ・ 人を変えることは、誰にも出来ない ▶ あなたの生き方を見て、変わりたいと思う人だけが変わる
- ・ 自分が変わる以外に、世界を変える方法はない
- ・ あなたの中のフリーライダー
 - 「〇〇さん、素晴らしい」
 - 「沖縄のために・・・」
 - いつかは、やりたい
 - 意見がない、質問がない